

そう決断した私は、さっそくワーキングホリデーなどを扱うバックパッカー専門の旅行会社を通して格安でヨーロッパを回れる《CCT キャンピングキャラバン》へ参加を申し込みました。このキャラバンは、外国の若者たちと一台のバスに乗り、キャンプ場に滞在しながらヨーロッパの主要都市を旅行していくというものです。費用は一カ月で約八万円（一九七七年当時）。イギリスまでのエアーチケットが往復三〇万円台だった時代です。

・・・

このとき私がやったことというのは、長い会話の中で、自分に必要な箇所だけに耳をそばだてるという方法ではなく、相手が一通り話し終わったら、今度は私の方から必要な情報だけを確認するというものでした。

“Excuse me.”（すみません）

から始まり、必要なことだけを何度も尋ねました。

自由行動の場面では参加者の女の子たちに、

“What time should I come back here?”（何時にここに戻ったらいいの？）

というピンポイントの質問を何度も繰り返して急場をしのぎました。会話こそ入ってはいけませんでした。一〇日ほど過ぎてみると、なんとか集団の中でもリラックスして行動できるゆとりが生まれました。

たとえば、人とかかわるのが嫌いで、普段無口と言われている話し下手な人がいたとします。こういう人はどんなに英語にお金や時間をかけても、人と接触し、意思疎通する力がないため、上達は難しいといえます。何度も言うように、言葉は人間の意思のあとに生まれるものですから、そこにコミュニケーションをとるという目的がなければ、言葉だけがスラスラと一人歩きするような奇跡も起きないでしょう。

最後に外国人と付き合っって一番ショックな瞬間というのが、

“Our relationship could not work.”

と言われたときです。

これは日本語に訳すなら、「私たちの人間関係は機能しない」ということで、「これ以上、付き合えない（別れよう）」と同意語です。カップルのどちらかがこの言葉を使うときは、“Good by”と同じ別離の意味となります。ある程度本気で付き合ったカップルが別れる瞬間、どちらが先に別れを切り出すかというときのセリフ。ドロドロとした男女関係にピリオドを打つ言葉なのです。

## 外国人の独身

者が集まるパブやバーは都内にもあります。六本木のはずれにあるキャッシュ・オン・キャリアの簡素なパブは別名「ミーティングバー」と呼ばれていました。ここに行けばパートナーをしている外国人、日本人の男女がたむろっているというのです。私も男友達一緒に一度行ったことがあります。店全体が薄暗くいかわしい雰囲気、昭和の赤線を彷彿とさせました。話を聞くと、わざわざリスクをしょってそういうところに出かけても、まともな交際に発展しないケースが多いようです。

私が不思議がっていると、社長はあっさりと言明かしをしてくれました。「ヘイ・オン・ワイっていう地名から分かるんですよ。”on”や”upon”は、『～の畔』という意味です。”Hey-on-wye”はワイ川の畔。シェークスピアの生まれ故郷の”Stratford-upon-Avon”（ストラットフォード・アポン・エイボン）はエイボン川の畔なんです」

まるでパズルを解くようなおもしろさは、英語ならでは。誰でも体験できます。

『ミスター・パートナー』の編集部が三〇人体制の会社組織になる前に、私は社長でありながら営業責任者を兼任していました。その頃はフリーペーパーに近い媒体だったので、収入源となる広告営業を社員にやらせて、自らもノルマを課して営業をしていました。

あるとき、営業数字が伸び悩んで窮地に立たされました。社員にはどんな局面でも目標を達成しろと言いつけてきた手前、格好がつきません。

その日は営業の締め切り日でもあったのです。

あと数社、契約を取るにはどうすればいいか。

・・・

私が電話を始めたときから様子をうかがっていた社員たちは、いきなりネパールに電話して新規の広告が取れるものかと思っていた風ですが「ヤッター」と飛び上がる私にぐうの吉も出ない様子でした。この契約で今月の目標額は達成。エベレストのふもと、国際ホテルの責任者に私はしつこいほどお礼を言いました。

・・・

まず広告の掲載締め切り時間を区切り、相手の得をはっきりさせるため、「ネパールに行く人の半分は利用するはず」とメリットを明確にしたせいで

欧米の女性がそうであるように、私もインテリアコーディネーターは大好きですが、DIY（日曜大工）にはさほど興味がありません。

家が完成してから現在まで、我が家をグラビアで取り上げた媒体は**百を超えます**。雑誌やテレビ、ラジオ、いろんなメディアが取材に訪れては、既製の住宅しか建てることができないと思っていた日本の大手ハウスメーカーが手掛けた家としては、価格もデザインもすべてが異例と評価してくださいました。

・・・

そのときイギリスのコテージ風住宅は既に完成していましたが、『**個性的な家をハウスメーカーで建てる！**』という本を自らの出版社で出していました。これは予想通り、日本人が家を中心に「個」の生活に戻り始める世の中の情勢にリンクし、タイトルも共感を呼んで、順調に売れていきました。

ところで、外国人向けの情報誌で私が編集長をしていた頃、「編集者募集」の求人を出すと毎日大勢の方から問い合わせがきました。「帰国子女」であると書かれた履歴書も山のように送られてきます。

彼らは試験をしてみると英語の発音がとてもきれいな上、ネイティブと変わらないイントネーションで英語を話します。ところが、**英語力を見越して採用して実際に現場に出してみると、なぜか期待を裏切られる場合が多い**のです。

前にカタカナで書いた英語を読んで、まるっきり英語に縁遠い営業マンがサイパンで広告費を取り立てたという話をしましたが、彼の方が会社的には“英語が使える人”という評価になります。